

「仕事をする事」の価値

静岡県・静岡県立富士宮西高等学校 1年 石川 咲子

ここ数年、ニートやフリーターの数は増加し続けている。テレビを見ればフリーター・ニートの特集が組まれていたり、今後の日本を危ぶむ意見をあらゆるメディアが伝えているのを耳にしたりする。それほど、この日本では「働かない・働けない」若者達が問題になっているのである。

私はあるテレビ番組で、定職に就かず、ネットカフェなどで寝泊まりをする若者の生活を見た。毎日がその日暮らして切羽詰まった状況であるにもかかわらず、定職に就こうとしない若者達の無気力な姿に私はとても疑問を覚えた。「なんとかなるさ」、「どうにでもなれ」そんな自分自身に諦めを感じる気持ちが、その表情に見て取れた。これからどんな未来が、可能性が待っているかもしれないのに、どうしてそれを否定し、自分を諦めてしまうのだろう。私はその番組を見た後、こんな若者が増えてしまった日本の未来がとても不安になった。

こんな日本になってしまった理由は一体何なのであろうか。

一つには、日本の社会全体に問題があることだ。最近耳にするようになった「格差社会」もこの問題に深く関わっている。それは長く続いてきた過酷な「競争社会」だと私は思う。いつしか「勝ち組」「負け組」という言葉が生まれ、成功した者だけが生き残るゲームの世界のような社会になってしまった。そしてその狭い入り口に人々が押し寄せ、目の前にい

る人を弾き飛ばしたり、弾き飛ばされたりして必死に戦い続ける。成功を手にした者は勝者とよばれる一方、うまくいかなかった者はその競争の波からはじかれ、苦しい生活を強いられる。一体、こんな社会で育った子どもが、自分の未来に将来性を見出せるだろうか。毎日仕事から疲れて帰ってくる親の姿や、幾度と無くもれる親の不安の声を聞いたり見たりして育っていく子どもが、先行きに不安を感じてしまうのも無理はない。大きく成長したときに、「勝ち」と「負け」、一刀両断に決められてしまうこんな社会でやっているか、という不安とプレッシャーが重くのしかかってしまうのは当然だ。

そして、豊かになりすぎたこの社会にも問題がある。インターネットの普及などによって、今急速に世界は身近で、近いものになりつつある。たしかにそれはいいことだ。好奇心旺盛な子どもは自分の知らない様々な世界に釘付けになり、より多くのことを知ったり、学んだりできる。それは子どもの発達の過程でよい影響を与えるだろう。だが、この世界との近さが、逆にその子ども自身の「世界の狭さ」を生み出してしまった。ネットの世界に浸り、多くの情報を手に入れる一方、それが世界の全てだと思い込んでしまうことに怖さがある。実際には、世界は想像できないほど広く、厳しいにもかかわらずだ。それを知らずにいきなり現実を突きつけられたら——。つまり、

子どもに幸せのために与えた「便利さ」がかえってその子ども自身を狭い殻に閉じ込めてしまったのだ。

二つ目の理由は、これまで述べてきたような環境的な要因ばかりではない。若者自身にも問題があるのである。なぜ定職に就かないのか——、それは自分に自信が持てず消極的な人々とは対照的に、理想は持ちつつも、「もっと自分にあった仕事があるはずだ！」と職を転々とする若者がいるということだ。いわゆる「青い鳥症候群」というやつだ。自分の可能性や、もっと活躍できる職場を求め続け、満足できなければすぐ辞めてしまうというくり返し。それは若者の精神面に深く関わる。親の過保護によって褒められ続けてきた子ども。兄弟内での切磋琢磨や、学校で孤立し挫折や劣等感を知らない子ども。そんな子どもが増えているのではないだろうか。だからこそ、自分の理想を追求しもっと自分には可能性があるとして過剰に追求してしまうところがあるのだと思う。

でも、その気持ちはわからない訳ではない。1億数千万といわれる人々がひしめくこの日本で、一体自分らしい人生を送れるのか私は時々不安になる。友達と話す時も「平凡な人生は送りたくないよね」という会話をよくする。普通に、人並みに、そんな生活を私は送りたくないと思っただけなのだ。たった一度の人生。これから広がる自分の歩む道を前にして、そう思わずにはいられない——、でも何をすればいいかわからない、そんな漠然とした気持ちがある。この曖昧なはっきりしない気持ちを抱える人はどれくらいいるのだら

う。私の自分の将来への不安は募るばかりだ。

ところで、「仕事」とは一体何なのだろうか。これは人によって意見が分かれるはずだ。人のため、自分のため、会社・組織のため……。色々あるが、その仕事は必ず誰かに向かい、誰かに通じていると思う。私は、仕事とは多くの人々の努力によって成り立つこの人間社会に生かされてきた分を、自分が大人になってから還元するための場であると思う。ひとりで生きてきた人など一人もいない。毎日食べている米や野菜、冷蔵庫・テレビなどの生活必需品、そして自分がこうやって学校に行き教育を受けられる日常に、どれほど多くの人々の努力や手が加えられていることか。そう考えてみると、今日働いた分が、必ずどこかで人のためになっていくことは本当にすごいことだと思う。どうやったら人のためになれるのかなと考えていた自分が、働くことによって知らず知らずのうちに人々の笑顔を生み出しているのである。「仕事に就く」、それは一人前の社会人となった証ではないだろうか。

お茶の間に人気のアナウンサーや大きなステージで脚光を浴びるスターもいい。でも、人に喜ばれ、幸せにさせる仕事はもっとたくさんある。しかし多くの若者はより強い刺激を求めて、あれじゃない、これじゃないと漠然とした理想を追い求めている。つまり、一回就いた仕事を続けようとせず、その場に留まる事を嫌がるのである。私は、一回就いた仕事はとことんやってみるべきだと思う。厳しい労働、厳しい上司。辛いことがあるたびにすぐ辞めたい。でも、それにくじけず続けてみることに価値はあるはずだ。今、自分はこ

の厳しい社会で生き抜いている、そんな自信がつくかもしれない。その仕事に根を下ろしてじっくり続けてみれば、見えてくるものがあると思う。最近よく聞く、「遅咲きの成功者」も、そんなじっくりやってきた結果が実ったということなのだと思う。人より遅いからといって劣っているということは決してないのだ。むしろじっくり時間をかけて咲かせた花に私は魅力を感じる。どちらにしろ、若いうちにうまくいかないからといってその後の人生が真っ暗なんていうことは無い。同じように歳だから、自分にはあまり可能性が残っていないと落胆してはいけないと思う。つまり、やらなければ分からないことはたくさんあるし、やり続けてみれば見えてくることがあるということだ。

私は今、漠然とだがやりたいことがある。人と向き合い、理解し、その人の心にある暗い部分を少しでも取り去って楽にしてあげるような仕事だ。それが何という仕事の肩書きであっても私は自分の夢の実現のため粘り強く頑張っていきたいと思っている。確かに不安はある。夢の実現はそう簡単に出来ることではないとよく分かっている。でも、これと決

めたことはとことんやっていくつもりだ。

「人のために働く」というと初めのうちははつきりせずよく分からないような、恥ずかしいような気がすると思う。でもきっと、自分がもう少し歳をとり、働く人々の苦勞を知るうちにその意味が分かると思う。「情けは人のためならず」というように、きっと自分が頑張った分はめぐりめぐって気づかないところで自分の笑顔に変わっているはずだ。私達はその見えない人々のあたたかい手に気づいた瞬間に、感謝の気持ちを抱き、「何故人は仕事に就くのか」ということを知るのだと思う。だから私は、自分が支えられていることを常に心に刻み、見えないところにあるものを大切にしないではいけないと思う。

そして私がこの日本に望む事は、「頑張った人が報われる社会の実現」だ。これなしに人々の幸せは成り立たない。また、増加し続ける、未来に希望の持てない若者の増加の歯止めには無くてはならない要素だと思う。「自分だけ」という考えでなく「みんなで」、そんな小さな気持ちの変化だけで、日本は大きく変わる事が出来るのではないだろうか。